嶺朋会報

平成25年2月28日発行
発行責任者
嶺朋会長
松本　玲子
印刷　富士ニュース社

第一回同窓生の作品展開催

高楼祭にて

嶺朋会長
松本玲子

学び舎の北にどっしりとそびえたつ霊峰富士の山が、白い帽子を七合目までかぶり、本格的な冬の前の穏やかな風景が正門から望められる頃となりました。一年ぶりの御挨拶ですが、皆様には、お元気でお変わりなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。

平成二十四年度総会は、五月二十七日、ホテルグランド富士で開催され、無事終了しました。例年五月第三日曜日、ロゼレセプションホールで開催となっておりましたが、会場の予約取りが年々過熱し、今年度は抽選から外れ、会場を変更せざるをえませんでした。多くの思いをお持ちの皆様方には、大変申し訳ございませんでした。

平成十四年に、昭和三十六年卒の私たち学年が、還暦を期して母校の体育館で、懐かしい恩師を招いて講演会を開き、在校生と共に親交を深めました。このような催しを継続して行うことを働きかけましたが、なかなか実現出来ないでいたところ、前会長小林様から、「高楼祭当日に同窓生の作品展を開催してほしい」という言葉と共にバトンを渡されました。そこで、役員会の同意を得、学校と交渉し、高楼祭当日に、同窓生のお部屋を一日オープンすることとなりました。学年幹事、支部長を通じ、同窓生の作品を募集し、六月三日（日）の高楼祭で、同窓生の作品を展示しました。当日は、多くの方々がお立ち寄りくださり、同窓生や在校生の方々との大きな交流の輪が出来ました。この催しは、単なる親交の輪というだけでなく、先輩の方々が多方面で活躍していることを知っていただき、在校生のみなさんが、将来の方向性を見出すひとつのきっかけになってもらえたら、という願いも込められております。来年も続けて開催いたしますので、是非、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。この度、皆様へよりリアリティに情報をお伝えしていくために、二十号から、カラー版にいたしました。皆様の動向や在校生の頑張りが、より明確にお伝えしていけることを喜んでおります。今後とも、同窓会嶺朋の活動に変わらぬご支援、ご協力をお願い申し上げます。

平成24年度『嶺朋』総会に寄せて

昭和36年卒　山本　和子

今年度の嶺朋総会は、五月の第四日曜日（二十七日）に、ホテルグランド富士において開催されました。

昨年の総会には、同級生十数名で出席し、最後に次回当番としてバトンをもらい、決意を確認し合った後、少しずつ活動に入りました。久しぶりの集合なのにブランクも感じず、嶺朋会長であり同級生の松本玲子さん・アトラクション担当の金刺美津子さんも加わり、楽しく準備を進めていくことができました。

さて当日、最後の打ち合わせをロビーで済ませて、一階が受け付け・二階が会場という条件も乗りきることができました。

一部の総会はとてもスムーズで、二部のアトラクションにゆったりと入れたことは、幸いでした。従来の鑑賞型から、全員参加という形を選びましたが、皆さん笑顔で輪唱・体操に加わって下さり、後日、楽しかったという感想を頂戴し、安堵致しました。そのあとの親睦タイムも最後の合唱も、おおらかで高らかな歌声が響き、何とか予定通り進行できたかなと思います。

総会が済んで次の日曜日の六月三日、吉高恒例の高楼祭に、「同窓会の部屋」が開設されました。初めての試みであることから、とりあえず掃除・作品展示・接待・接客等のお手伝いを致しました。生活館入り口の部屋であったため、多くの在校生や父兄が立ち寄って下さり、大きな手応えを感じました。

準備から総会・アトラクション・高楼祭のお手伝いまで、当番学年としての役割が無事終了できましたことは、言うまでもなく、参加して下さった同窓生の皆さんの温かいご協力と、支えてくれた同級生の強い団結力があったからこそと、心より感謝しております。さらに、皆さんからいただいたこの大きな力が、後輩の活動に接し、今後の吉高の歴史を築く源になるのだろうという期待をもつことができました。

このような思いを報告としてお伝えし、次回の当番学年にバトンをお渡ししたいと思います。

お知らせ

平成25年度　吉原高校同窓会

「嶺　朋」総　会

日時:平成25年5月12日(日) 午前10時～
会場:ホテルグランド富士
会費:5千円(当日会場で、申し受けます)
※申し込みは各学年理事まで

支部だより

大渕支部
昭和35年卒
勝又美枝子

小さな一歩から

一昨年、嶺朋総会の当番学年にあたり、同窓会に参加しました。懐かしい同学年のみなさんのアトラクションと美味しい食事に、私も童心にかえり、楽しくおしゃべりもはずみ、華やいだひとときをもちました。そして、昨年、大渕地区の支部長を仰せつかり、役員会の時、卒業後初めて、母校の門をくぐりました。

戦時中の生まれの私たちは、親の苦労を見て育ちました。農繁期には、田植え、茶摘みにかりだされ、姉妹でよく手伝いをしたものです。私たちが、高校へ進学する頃は、県立吉原高等学校は、あこがれの的でした。親から、「滑り止めの余裕はないから、一発合格だよ。」と念を押され、がんばりました。真新しい制服に身を包み、勉学にスポーツに励んだ、あっという間の三年間でした。

卒業してから五十年。人並みに、平凡に暮らしました。

昨年、依頼があり、諸先輩の培った重厚な同窓会を守るため、大渕地区支部長をお受けしました。現在、卒業生名簿の整理のために、地区にお住いの卒業生の皆様に、電話をかけたり、家を訪ねたりと、一人でも多くの会員とコンタクトをとるように心がけております。私の歩みは、蟻の歩みのようなものでありますが、何ごとも「小さな一歩から」と思い、地区のみなさんとのつながりを大切に、活動しております。今後とも、どうぞ、よろしくお願いいたします。

関東支部
昭和31年卒
大町　勲

無関心から一転、支部長に

昭和三十一年卒業後、同窓会という観念は、自分の頭の中にありませんでした。同級生から誘いをいただいたこともあり、何回か出席ができ、総会の司会経験もさせていただきました。在職中は会社人間で「企業戦士」とおだてられていましたが、難しいものだなと思いました。

会社を定年後、アジア、アフリカ等でボランティアをしましたが、戦争の悲惨さ、親のない子の寂しさなどを、自身の体験をふまえて感じることができました。

会社を離れると、故郷が身近に感じられるようになり、七十歳を区切りにボランティアを後輩に引き継ぎ、嶺朋関東支部総会にも顔出しができるようになりました。支部長の依頼があり、体力には自信がありましたが、会社とは異なり、女性の多い組織をまとめる能力は皆無で、認知症一歩手前とは思いましたが、度胸でお受けしました。

本年度の関東支部総会開催の経緯について記します。前任の支部長橋本先輩から引き継いだ資料は正に教科書でありました。年度別に整然と整理されており、アバウトな自分にも理解し易かったです。会員名簿も苦労された跡がにじみ出ておりました。例年、総会の案内は五百名ぐらいに配布され、出席者は一割の五十人前後のようです。当日の会議次第から卒業年度別に出席者をリストアップすると高齢者の減少が目につきます。当然の結果であり、若年層の勧誘が課題であることが見えてきます。

事前調査として、出欠のはがきをいただいた中から、昭和三十二年卒業以降の百人にアンケートを依頼しました。回答率五十一％、未回答三十七％、宛先不明十二％で、回答者の三十三％は出席したい、未定十四％、欠席四％の好結果を得て、気分を良くしました。この中には学年代表の依頼もありましたので、概算八十名の出席者が見込める可能性があると判断をしました。

平成二十四年四月、総会の開催案内を郵送開始しました。一週間後から回答が届くようになり、期待で胸を膨らませていましたが、不参加が圧倒的な多数で、開催が危うくなってきました。役員と相談して電話での勧誘に切り替え、かろうじて四十人の参加者を得て、開催の運びとなりました。

この教訓を得て、次回はリベンジするぞと思っております。

会員だより

男女共学一期生として

平成10年卒
監物　正永

男女共学の一期生として吉高に入学し、卒業して十五年がたちました。しかし、十五年の間には、いろいろな私なりの歴史がありました。大学入学、卒業、社会人となり、結婚もしました。平凡ではありますが、時の流れの早さに、しみじみと思いをいたす今日この頃です。

そうした平凡ではあっても、地道な生活の基となっているのが、吉高で過ごした三年間です。平成七年に入学した当初の私は、とにかく緊張していました。男女共学の一期生のため、当然のこと先輩は女生徒ですし、クラスメートも女子が多かったからです。しかし、創立から百年に近い伝統ある吉原高校の節目に立ち会えた誇らしさも、同時に感じました。

部活動は、弓道部を選びました。高校生になったら、新しいことを始めたいという気持ちだったことと、他校にはない部に入りたいという思いがあったからです。同級生や後輩に恵まれ、副部長をさせていただいたのも、今の生活を支える大きな力となっています。皆に支えられながら、厳しくも楽しい部活動ができましたし、それが高校生活を輝かせてくれました。卒業してからも、高校時代の気持ちに戻って語りあえる友人たちと出会うことができたことは、本当に幸せなことだと思います。

私は国際科でしたので、オーストラリアでのホームステイも経験しました。語りつくせないほどの貴重な体験と思い出づくりができました。今の自分があるのも、吉原高校での三年間の生活があったからこそだと思いますし、すべてが有り難かったといえる三年間を過ごすことができました。

現在、そして未来に、吉原高校に通う皆さんにも、卒業後に振り返ったとき、充実したいい高校生活だったと言える毎日を過ごしていただきたいなと思います。

誰かの役に立てること

平成16年卒
大村　理沙

私は、小学三年生から中学、高校とバレーボールをやってきました。正直吉原高校に入学したときは、サッカーも考えたのですが、バレーボール部に尊敬できるあこがれの先輩がいて、バレーボールを続けることにしたのです。

吉高時代の部活動では、楽しい思い出しかありません。先輩にも後輩にも、監督にも恵まれ、バレーボールを通して多くのことを学べたからです。仲間の大切さはもちろんのこと、プレーの中で気遣いや思いやりの大切さを実感しました。それは、日常生活にも生きる人間としての根本を培う力になったと思います。

「他の人にもバレーボールを好きになってもらいたい。」「バレーボールを通して、学んでほしい。」その思いで、中学校の教師を目指しました。そして、今年の四月から、夢の中学校教師となり、部活動もバレーボール部の顧問となりました。今、毎日が楽しく、充実しています。

しかし、この日々をつかむまで順風満帆だったわけではありません。数年の講師生活を経なければならず、その間、生徒の人生を左右する大切な仕事に、私は向いていないのではないかと悩むことも多々ありました。そんなある日、教育実習でバレーボールを教えた生徒から手紙が届きました。「先生の一言が、私を支えてくれています。先生のような大人になりたい。」とありました。正直、自分が何を言ったのか覚えていません。でも、こんな私でも、誰かの役に立てるのだと思いました。教師という仕事は、大変だけれどすばらしい。

生徒と一緒に日々成長していきたいと思いました。

「幸せは自分の心が決める」私の好きな言葉です。誰かの役に立てることは幸せなことだとしみじみ思っています。

「自分」を振り返って

平成19年卒
青木　美緒

吉原高校を卒業してから約五年。自分の高校時代を振り返ってみて改めて月日の経過を思い知らされます。

中学時代に英語が好きだったので、語学力の向上を目指し、国際科に進学しました。普通科よりも英語の授業が多く、外国人の先生とたくさん関わることができ、高校二年生ではオーストラリアでホームステイ。英語三昧でとても貴重な体験をすることができました。

しかし、高校三年で、進路決定という大きな壁にぶつかりました。今後自分は何をやりたいのか、適性の職種は何か、進路の方向が決まらずとても悩みました。悩んだ末に英語だけでなく幅広い知識を学ぼうと思い、経済学部への進学を決めました。

大学へ入ってからは、ボランティア活動に参加したり仲間と一緒にサークル活動や海外旅行に行ったりと、とても充実した日々を過ごしました。

しかし一難去ってまた一難。就職氷河期と言われた年に就職活動が始まり、なかなか内定をもらえず、とても苦労しました。そんな中、自己分析として過去を振り返ったとき、思い出したのはやはり高校時代でした。辛い経験や楽しい経験を高校時代でしたからこそ、今の自分があるのだと気づかされました。

その後無事一般企業に就職することができ、社会人になって今年でもう二年目。仕事にも少し慣れてきましたが、仕事ばかりで自由な時間は激減し学生の頃はよかったなとしみじみ感じる今日この頃です。しかし忙しい日々を送っているからこそ、ホームステイや授業など吉原高校で過ごした三年間がとても貴重な時間であったと感じられるのだと思います。これからもさまざまな困難にぶつかると思いますが、学生時代の経験を心の糧に成長していきたいと思っています。

〝華の大学生活〟

平成23年卒
望月　彩那

吉原高校を卒業してから約一年半が経ちました。私は今、京都外国語大学に通い、日本語を専攻しています。母国語である日本語を専攻しようと思ったきっかけは、中学時代の恩師である町田翠先生との再会にあります。吉原小学校の国際交流教室で外国人の子どもたちに日本語を教えたり、学校の宿題をみてあげたりする翠先生の姿を見て、「こういう職業もあるのか。」と新しい発見をし、「日本語教師になりたい。」という夢が湧き起こりました。その夢を抱いたまま受験生となり、当時の担任であった石井一則先生にこの大学を勧められました。

大学一年の講義では、教壇での実践日本語教育がありました。初めは、母国語を教えることがこんなにも難しいことなのかと、自分の無力さを思い知らされるばかりでしたが、発表の回数を重ねていくうちに、自分の授業を評価していただけるようになり、教師という職業の素晴らしさを実感することができました。

日本語学科には留学生もいるのですが、彼らは大学に入学する前に、二年間日本語学校で勉強してきます。そのため、流暢に日本語を話します。また、日本人の私でも考えさせられるような難しい日本語も知っているので、恥をかくことも多々あります。

しかし、そのことが「留学生に負けていられない。」と、私にとって良い刺激となってくれています。異国の地に一人でやって来て、日本語を習得している彼らの行動力・忍耐力・努力を見習わなければと痛感させられます。

古都の文化も学べる京都の地で大学生活を送っている私は、今とても幸せです。この地に導いて下さった町田翠先生、石井一則先生、受験担当の佐々木先生、吉高時代にお世話になったその他全ての先生方に感謝しています。吉原高校を卒業できたことは、私の誇りです。

正しき富士

学校長
奥山　和弘

静岡県の象徴・富士山は美しい。

三十六年前の夏、教員採用試験の小作文を、私はそこから書き始めた。課題は「あなたが育てたい生徒像」。

遠くから眺める富士は美しい。だが、近づいて見れば、それはごつごつとした岩だらけの山だ。風呂屋のペンキ絵のようなきれいなだけの富士はいらない。内にごつごつとしたものを秘めつつ、しかし、距離を置いて見れば美しく見える、それこそが本物の美しさだ。

「ごつごつ」は、評価されにくい個性だとも言える。それは栗のイガのようなものだ。それを削り取ってしまえば、小さくまとまった球が残るだけだ。だが、トゲを隙間なく生やしていけば、やがてひとまわり大きな球に成長する……。

そんな内容だったと記憶している。ペンキ絵うんぬんは、太宰治の「富嶽百景」、栗のたとえは教授の雑談からの受け売りだった。ただ、私は藤枝育ちで、富士山を間近に見たことはなかった。

教員になってからの勤務も県庁から西ばかりで、富士山とは縁が薄かった。だが、その富士山が、今、目の前にある。

秋になり、空気が澄んでくると、職員室からもまさにごつごつとした山肌がくっきりと見える。雪に覆われる前のひととき、富士山は、それが巨大な火の山であったという原始性を現す。

我が校の校歌には「正しきもの富士とわれらと」と歌われている。この「正しき」に、私は飯田蛇笏の「芋の露連山影を正しうす」を重ねている。句の季節は秋だが、雪を被った富士にこそ、この「正しさ」はふさわしい。「ごつごつ」を蓄えつつ、しかし威儀を正し、凛としたたたずまいを見せる富士。さて、本校の生徒たちはどうか。

教員生活の最後に本校に赴任できたことに、運命の粋なはからいを感じている。

初めての「全国大会」ＪＲＣ部

初日は、富山県内でフィールドワークを行った。夜は、代表生徒が各学校の紹介を行った。二日目の発表では、どのグループもしっかりとした感想が述べられ、学習の成果が窺えた。以下は、生徒の感想である。

二年　藤田　琢己

私は「フォーレスト八尾会」の見学を選び、桑の葉を実際に収穫・加工する作業を体験しました。桑の葉は、お茶を始め、色々なスイーツにアレンジされ売られています。経営面のお話も伺うことができ、大変勉強になりました。

二年　長邉さつき

私は「デイケアサービス」を選びました。障害を持った子供から高齢者まで、様々な人が一つ屋根の下で暮らす、珍しい所でした。富山型デイケアサービスは、他と違い、規則に縛られない自由度の高いもので、とてもよくできたシステムだと思いました。

剣道で学ぶ

剣道部顧問　高瀬　裕功

本年度、全国総体・国民体育大会に、三年生風岡里奈が県代表として出場させていただきました。また、新人戦に続き、インターハイ東部大会でも、男女アベック優勝を果たし、「剣道の吉原」の名を高めましたが、反面、全国で勝つことの難しさを痛感しています。

剣道部は、学校・後援会・同窓会・父母の会等多くの方々に物心両面から支えられ、吉高を代表する部活動になりました。心より感謝する次第です。

剣道の理念は、「剣の理法の修錬による人間形成の道である」といわれています。部員には「剣道を取ったら何もない人間になるな」を

指導の根幹に、「剣道を学ぶ」のではなく、「剣道で学べ」と教えています。これからも子供達の成長に携わっていきたいと思っております。

今後共、より一層のご理解・ご支援の程お願いいたします。

広報部新聞班

二年　部長　倉澤　純凜

私たち広報部新聞班は、一年生五名、二年生二名の計七名で活動をしています。まず新聞編集委員会としてスタートし、三年前に広報部新聞班として発足しました。

現在、三年連続で全国コンクールに入賞し、全国高等学校総合文化祭への出場も果たしています。今まで新聞制作に携わった先輩方の伝統を受け継ぎ、これからも吉原高校に風を起こしていく新聞を発行し続けます。

現在、私たちは校内のニュースを一早く取り上げ、速報紙「吉原高プレス」を随時発行しています。また、七月と十月には、本紙として「吉原高新聞」を発行しています。読み手の気持ちを考えて、何度も企画会議を行っています。

まだ至らぬ部分もあると思いますが、「新聞は足で書く」をモットーに部員一丸となって頑張っていきます。これからも応援をよろしくお願い致します。

ソフトテニス部

顧問　小池　敏文

今年のチームは、昨秋の新人戦県大会個人戦で鈴木優紀・鈴木あかねペアが準決勝まで勝ち進んだので、三年ぶりに冬の東海高校選抜大会に出場することができました。

冬場には、今まで知らなかった大会から出場の誘いを受けるなど、初めての経験をたくさんできたチームとなりました。

総体県予選では、プレッシャーからか、鈴木ペアは目標に届かずに敗れてしまいましたが、もう一つの三年ペアの廣瀬美咲・高橋夏未ペアは、本校としては五年連続となる東海総体出場を勝ち取ってくれました。

新チームは、部員六名（二年生四名・一年生二名）と、より少人数ですが、目標を明確化し、それを実現するために、自律した活動ができるようになりたいと頑張っています。

新体操部

三年　部長　松下　千晶

私達新体操部は、インターハイ出場を目標に毎日の練習に取り組んできました。県大会を勝ち抜くことは簡単なことではなく、毎日辛い練習ばかりでしたが、常に高い目標をもち続け、目の前にある壁にぶつかりながらも、一つ一つ乗り越え、全国大会への切符を掴むことができました。

全国大会では、部員全員初めての全国大会だったので、経験の浅さから自分達の力を出しきることができませんでしたが、最高の舞台で演技できたことは、一つの自信となりました。これまで、私達が練習し、結果を出すことができたのは、顧問の敦子先生はじめ、多くの先生方、両親、今までの伝統を築き上げて下さった先輩方のおかげです。感謝の気持ちを忘れることなく、これからも最高の演技で恩返しができるよう、部員全員で頑張っていきたいと思います。応援をよろしくお願いいたします。

仲間の文芸

短歌

現身（うつせみ）の姿摸せしか羅漢像囲碁するもあり酒のむもあり
昭和十三年卒　丸山たか子

幼子の赤き長靴一足に老いのたつきは明るくなりぬ
昭和十六年卒　宮本　志づ

剪定の終はりし狭庭の展けたり子等の記念樹輝き育つ
昭和十六年卒　渡辺富士子

庭に咲くドイツ水仙見る度に姑と暮せし遠き日偲ぶ
昭和十八年卒　岩佐　清代

手際よく掃除すすめるヘルパーが生きいきと見ゆありがたきかな
昭和二十八年卒　遠藤　和子

また一人旅だちたりしともがらの分も生きんとわが身鞭打つ
昭和二十八年卒　下條　剛一

東雲（しのの）の紫紺の富士に真向ひぬ歩き歩きて母校を廻る
昭和三十四年卒　芦澤　節子

たらちねの亡き母は静かに事運ぶ子ら七人の手本となりて
昭和三十七年卒　西川ひさ江

夏の夕べ雨の匂いのたち上るホース延ばしし幼の手元に
昭和三十九年卒　漆畑　典子

神よ今自国と子等を守りませ崩れゆく富士に唯拝む我
昭和六十一年卒　牧野　育美

俳句

人とゆふ支へ合ふもの風薫る
昭和十六年卒　海野　愛子

月天心木曽の木橋を渡りけり
昭和二十一年卒　長島　初江

飛び石は石臼まじりすべりひゆ
昭和二十二年卒　渡辺　清子

夜の秋一人居の部屋広きかな
昭和二十二年卒　藤田千代江

癒えし身にかなう歩巾や草の露
昭和二十五年卒　丸山　光子

秋麗の富士完璧の裾を引く
昭和二十九年卒　福沢貴美子

春の夜をやさしく刻む古時計
昭和三十年卒　岩間　玲子

積み上げし書籍片付け盆を待つ
昭和三十一年卒　小林　令枝

大富士へ真向かふ茅の輪潜りけり
昭和三十一年卒　関口喜代子

浜木綿咲くホームに列車滑り込む
昭和三十三年卒　尾澤三千代

春光や大川を行く伝馬船
昭和三十七年卒　三木　政代

シャンソンは祭壇の人薔薇の通夜
昭和三十七年卒　金子　里美

編集後記

楽しく御覧くださいましたでしょうか。節目に当たる第二十号からオールカラー印刷と致しました。コート紙に質感も変えて、明るく、そして美しい紙面作りに工夫してみました。皆様方が読んでみたいと、手に取っていただけるものと期待しております。

この度のリニューアルに際し、多くの皆様、富士ニュース社様に、心より感謝申し上げます。

今回『会員だより』も、全員、平成卒の若い同窓生特集を組んでみました。次回はまた、ランダムに幅広い年代層の方々の御寄稿をお待ちしています。

なお初めて、編集委員の方々の写真を載せ、御紹介致します。今後共、一同頑張ってまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

（神田）

編集委員長　神田富美子
編集委員　渡井　明子・小林　君子
佐藤　召枝・鈴木　綾子
渡邉　弘子・勝亦　敦
顧問　飛奈　昇

支部長名簿

平成25年2月現在

支部名	氏名	卒年
吉原	鈴木　武子	27
今泉	吉田　京子	38
広見	小林　昭子	40
青葉台	佐野　敏江	31
大渕	勝又美枝子	35
原田	鈴木須美子	33
吉永	豊田　幸子	34
須津	涌田　典子	35
元吉原	米山てる美	38
今泉北	渡辺　昌則	27
吉永第2	望月留美子	43
富士見台	芦澤　馥子	34
浮島	太田　若代	38
鷹岡	為田多喜子	33
岩松	影山　玉実	53
富士北	河野まさ子	37
富士南	鈴木　紀子	34
田子浦	安田　幸子	38
富士宮	加藤　雅子	37
沼津	猪浦　玲子	47
静岡	宮下　能弘	28
関東	大町　勲	31
富士川	望月のり子	41
松野	原　郁美	50
蒲原	宇佐美節子	38